

## 意見陳述書

控訴人 大熊みどり

### 1 はじめに

国東市安岐町の大熊みどりです。きょうは農業関係の陳述が続きますが、農・食はいのちの基本であり、生き方といつてもよいと思いますので、どうぞその点を念頭に置かれてお聞きください。

私は広島県で育ちましたので、被爆2世の知人も何人かいます。今年の10月、広島市での『世界核被害者フォーラム』に参加しました。このフォーラムは10年ぶりの開催で、国内外の核被害者の実体験を反映させた核被害者救済と権利確立を目的とします。2日間にわたる密度の濃いスケジュールで、世界各国、福島県等から数十人の核被害者や専門家らが登壇されました。実際に世界で共通して起こり続けていることは、核は「軍事利用」であろうと「平和利用」であろうと、貧困の地域において、核のもととなるウランの発掘で放射能を浴びたり、原発ができることによる地域や家族の「分断」だということが強く印象に残りました。

### 2 原発と「分断」

「分断」で連想するのは、2011年3月の福島の原発事故です。私が原発問題を強く意識するようになったのは、まさにこのときでした。国東半島の我が家の近くの小高い丘に立つと、空気の澄んだ日は、隔てるものない海の55km先の伊方原発が見えるのですが、にもかかわらず、見ないようにしていたことを私は反省しました。

当時、毎日悲惨な報道がされていました。原発の安全神話は崩れ家族離散。去った人、残った人、そしてその間を彷徨う人々。目に見えぬ放射能で野菜・畜産・稻作農家、土に携わるおおぜいの人たちが、やむにやまれぬ気持ちでその土地と離れたのに違いありません。そしてきっと、原発開発の始まったときにも土地買

収から始まる家族の亀裂、分断があつただろうと、つらい気持ちになりました。

そのつらさは傍目にはわかりません。私は、ふだんは封印していた自分の経験した「分断」について、思い出さずにはおれませんでした。

### 3 自分自身の分断の経験

私たち夫婦は36年間、自然卵養鶏を生業として生きてきたのですが、養鶏を始めて間もないある日突然、我が家のある上流にゴルフ場建設の話が持ち上がりました。

「帰ってこない跡取り。山を持っていても木は金にならない。自分は老いて山の手入れもできない。」「山を買ってもらえる！」地区の人たちはもろ手を挙げて賛成しました。

私たち夫婦だけが建設に反対しました。ゴルフ場ができれば水源地の農薬汚染により養鶏を続けられなくなる。自分たちのたんぽに除草剤が流れ込む。それまで農薬を使用せず、日照りの中、汗まみれで除草機を押し続けた稻田です。断じてNOでした。何よりも危険な地下水を子どもたちに飲ませられません。

当時、ゴルフ場の除草剤の危険性がテレビで放映されていました。収録したビデオを借り、なけなしの金でビデオデッキを買い求め、地区集会で見てもらいました。しかし、「地下水に農薬は出ない。」とけんもほろろ。それからは村八分状態でした。この除草剤問題は、下流地域の人たちの水質汚染問題として反対運動が起きました。しかし、反対運動も虚しくゴルフ場建設は始ましたのです。

ゴルフ場問題で一番つらく悲しかったのは、同居していた両親との毎日絶えることのない言い争いでした。家族がバラバラになってしまいました。両親は私たちに「お前ら出ていけ！」と言い、私たちは身も心もボロボロになり、地区を離れる決心をしました。幸いにゴルフ場建設反対者のご厚意で、町内の別の地区に新しい土地が見つかり、そこで自然卵養鶏を再開できましたが、本当につらい体験でした。

さて、福島第一原発ではいまだに放射能汚染水が流れ出し、日本のあちこちで

地震が頻繁に起こっています。南海トラフ地震の危険性は日増しに高くなっています。伊方原発で事故が起これば大分県のみならず瀬戸内海も一変するでしょう。想像すると恐怖を覚えます。福島での人と人、人と故郷の分断は、決して他人ごとではなく、私たちの目指した根っこのある暮らしはできなくなるでしょう。

#### 4 夫の思い

私たち二人の好きな俳句に、良寛さんの「焚くほどは 風が持て来る 落ち葉かな」があります。夫に言わせると、「『焚くほどは』の『ほど』は、『ほどほど』『分相応』といつてもいいかもしれない。人間も自然の一部であり、その摂理を守り『分』を知るなら生きていけるぐらいのものは向こうからやってくるということである。」そうです。世の中に対する憂いはさまざまにありました、「焚くほどは 風が持て来る 落ち葉かな」、そんな貧乏暇なしではあっても搖るがない暮らし、何気ない日常が続くと思っていました。

ところが、夫は2016年9月に亡くなりました。病床で原告になろうとしていましたが、提訴に間に合いませんでした。二人とも原発を早くとめたい気持ちは同じでした。本当はこの場所に立ち、思いの丈を述べるのは彼だったと思います。その思いを受け、少し彼の話をさせてください。彼が新聞に連載していた『熊さんのトリ小屋通信』というコラムから、原発について書いた文章を引用します。「『残さない』暮らしを」という題名です。

「リサイクルなどという前に、自然に戻らないものは作らないぐらいの覚悟がなくては人類はゴミによって滅亡する。今から数百年後の世界に何を残すかが問題なのではない。『何を残さないか』が問われている。」

「原発が事故を起こせば海も山も漁業も農業も永遠に被害を受け続けるということなのだ。」

「万が一のときはすべてを捨て逃げまどう、その時のための訓練を金をかけてするなどというのは正気の人間のする沙汰ではない。」

私たちは原発を未来に残すべきではありません。

## 5 おわりに

一緒に原告になるはずだった連れ合いはもういませんが、二人でこの裁判に参加し、闘っているつもりです。

彼に一刻も早く喜びの報告をしたいと思います。

以上